自立と社会参加を目指して

特別支援教育と私

私は、今年、教職二十三年目を迎えました。この内七年間、私は特別支援教育に携わり、現在はそれを生かして通常の学級を担任しています。今、一生懸命、特別支援教育で奮闘している先生方や通常の学級で悩んでいる先生方のお役に少しでも立てばうれしいです。

私が、特別支援教育に携わるようになったのは、学生時代に、専攻する学科のほかに、当時の養護学校の免許を取得したことがきっかけです。学校で働くようになり、学んだことがなかなか生かせないもどかしさに直面することも少なからずありましたが、そんなとき、尊敬する先輩教師から「特別支援学級を担任してみない？」と誘われました。折しも現場は、特殊教育から特別支援教育へと変わったばかりでした。学生時代に学んだ知識も古くなってはいましたが、かつて学んだ経験が背中を押してくれて、一念発起しました。自分では手を挙げる勇気と覚悟がもてずにいましたが、あのとき、声を掛けていただいて、本当によかったと感謝しています。

特別支援学級を担任して一番学んだことは、「子どもたちへの寄り添い方」です。それまで私は、子どもたちにどんなときでも平等に接することが正解だと思っていました。例えば授業は一律に同じ方法で問題を解かせていたし、「ここまでは絶対に理解をさせるぞ」と一律に最後まで終わらせるようにしていました。でも、個性豊かな特別支援学級の子どもたちと過ごすうちに、みんなと同じにすることがとても辛い子もいることに改めて気付き、個々の子どもたちの実態に応じて指導していくことが大事なのではと思うようになりました。もちろん、十分な配慮は必要ですが、「本来はここまでが指導計画上の目標とな

っているが、最低でもこのあたりまでは確実に理解させたい」と二段階を想定しておき、授業では柔軟に対応していくことで、気持ちが楽になる気がします。

また、特別支援学級では、その子によって学びやすい方法が違っているため、どの方法が適切なのかを探りながら学習を進めます。このことは、通常の学級を担任している今も、とても役に立っている考え方です。「指導と評価の一体化」と言われますが、子どもたちの様子を見取り、反応が薄かったり、手応えが感じられなかったりしたときには、すぐに指導の方法を振り返り修正する癖が付いたのは、このときの経験のお陰だと思っています。

教師として、私が大切に心掛けていることは、いつでもアンテナを高く張り、自分を磨き続ける意識をもつことです。授業力を高めたり、児童の変化に気付いたりするためには、感度のよいアンテナをもち続け、常に自分をバージョンアップさせる必要があります。そのため、どんな年齢や立場になっても「謙虚さ」と「学ぶ姿勢」を忘れないようにしたいです。また、最近、自分の中で大切に思っているのは「つなぐ」という考え方です。学習していることを既習の学習内容や知識とつなぐ、教師と子どもたちをつなぐ、子ども同士をつなぐ…。コーディネート力が問われますが、子どもたちが物事を主体的に考えるきっかけを与えたいと思っています。

教師の仕事は、子どもたちにたくさんの「種を蒔くこと」だと思います。いつ芽を出すか分からないけれど、栄養を与え、水やりを続ける。そしていつか「あのときの種がきっかけだった」と子どもたちに思ってもらえる瞬間がきたら幸せだなあと思う今日この頃です。

野木町立新橋小学校　吉田　理徳子

「応答する環境」を目指して

「楽しくやることが大切だから」

これは、通級指導教室の担当になると決まったときに校長先生から掛けられた言葉です。そのときの私には、この言葉はあまりにも漠然としていて途方に暮れたことを覚えています。幸い一年目には、現在の栃特連北部支部言語難聴班の先輩諸先生方が指導方法や私の悩みに丁寧に答えてくださり、二年目には内地留学の機会をいただきました。

内留指導の担当の先生が常々口にされていたのが「応答する環境」という言葉でした。社会心理学者ムーアが「子どもの環境への働きかけに対して、環境からの適切な応答性が子どもの知的好奇心を喚起する」と提唱したものです。私は「環境」を「人・場所・もの」と考えています。かかわり手が子どもにとって「なじみの人」に、居場所が「なじみの場所」になり、学習も「なじみのもの（活動、教材・教具）」になるなら見通しが立ち、楽しく分かりやすく、それが安心につながって学習が成立します。特別な支援を必要とする子どもたちの多くは成功体験が少なく、新しいことに取り組むときには不安が強くなりがちです。ですから、子どもの活動中の様子によく目を向け、うまくいっていれば続け、難しそうだと思われたら止めて、違う方法や教材・教具を考えるようにしています。

そうしてうまくいっている環境の中で、子どもたちの何を伸ばそうかと考えたときに思い出すのが、当時の矢板中学校沢分校の教頭先生のお話です。「子どもが自分の気持ちや考えを言葉で適切に表現できるようにしてあげましょう。『うざい、めんどい、無理』としか表現できないなら、それを改善するとその後の行動が整ってくる」ということです。

特別支援学級では、子どもと教師が一緒に過ごす時間も長く、様子や状況を把握しやすいので、その時々の行動や気持ちを大人が言語化してあげられます。それを子どもが徐々に自分の言葉として使えるようになってくると、うまく生きていくことができるようです。

偉そうなことを書きましたが、自分自身の子どもへの支援がいつもうまくいくわけではありません。「よかれと思って掛けた言葉や支援が逆効果になってしまった」ということも何度となく経験しています。失敗は成功のもとと自分を慰めつつ、帰る車の中ではよく「一人反省会」をします。「〇〇と言ったら、子どもの顔が曇ってしまったな」「△△の教材を□□に変えたらはかどったな」などです。繰り返すうちに自分の声掛けや支援もうまくなってきたような気がすると同時に、帰宅後は仕事のことは考えずに済みます。以前は就寝前に考えすぎて寝付けなくなったことがあったので、引きずらないようにしています。さらに、困ったことがあれば一人で抱え込まず、周りの先生方にＳＯＳを出すのもよい方法だと思います。三人寄れば文殊の知恵ですから、必ず策が見つかります。学校のチーム力を借りましょう。

今も、日々の試行錯誤は続いていて、「楽しくやる」の答えは模索中ですが、子どもが私の顔をよく見てくれて、私もその子にきちんと応答できているときには「楽しくやる」ことを共有しているのではないかと感じます。最後に、皆さんに読んでいただきたい本をご紹介します。何かのお役に立てば幸いです。

『ことばをはぐくむ』中川信子著（ぶどう社）『子どもへのまなざし』佐々木正美著（福音館書店）『自閉症の僕が跳びはねる理由』東田直樹著（エスコアール）

那珂川町立小川小学校　山本　敏江

子どもたちと共にあること

通常の学級の担任時代は、一斉指導の中での個への関わり方について試行錯誤した。たくさんの個性に触れ、集団で物事に取り組み得られる達成感にやりがいを感じながらも、不登校や発達障害傾向の子どもなど、一斉指導の中で困っている子どもへの関わり方は難しく、学習や行動面での課題に対する対応の仕方について悩みや不安は尽きなかった。そのたびに、発達障害や支援方法について学び、先輩の先生方からのアドバイスに励まされながら、支援の方法を模索した。リズムに乗せると覚えやすい子どもがいることなど様々な方法に取り組みながら、一斉指導の中で個を意識した支援は、クラス全体や他の子どもへの支援にもつながることを実感できた。そして、もっと個別に関わり、子どもに自信をもたせたいと思うようになり、特別支援教育の世界に飛び込んだ。

言語障害通級指導教室の担当時代は、遊びの中に学びがあること、子どもの興味・関心に寄り添うことの大切さを実感した。

Aさんとの初回の授業の時のこと。Aさんは挨拶もそこそこに、目に入ったプラレールに飛び付いた。初めての出会いを成功させるため、事前情報をもとに活動内容を考えて臨んだが、時すでに遅し。タイマーをセットしても、保護者が声を掛けても切り替えられなかった。保護者も見守る中、焦りは募るばかり。しかし、Aさんが楽しそうにつなげている姿を見て、自分が気持ちを切り替えた。保護者にも一声掛け、授業時間内全て、部屋いっぱいにプラレールをつなげることにした。結果、それでよかった。満足した様子で帰宅し、次回からは少しずつ言語に関する指導ができるようになり、活動の切り替えもできる

ようになっていった。個別指導だからこそ、子どもも自分の欲求を通そうとするのだと実感した。保護者の願いを受け止めながら、子どもの興味・関心を生かして教材を作成したり、指導方法を考えたりできる自由度の高さにやりがいを感じた。そして、週一、二回の限られた回数ではなく、毎日子どもたちと関わり合いたいと思うようになった。

そんな時、特別支援学校への交流研修の機会を得た。言葉が話せなくても、相手の目や表情を見て思いを伝えればコミュニケーションはとれること、長期的な計画の中で少しずつ繰り返すことが「できる」につながること、全てに手を差し伸べることが適切な支援ではないことなどを実感した。毎日が驚きと戸惑いの連続であったが、楽しく貴重な経験ができた一年間であった。

現在、私は特別支援学級の担任をしている。毎日「おはよう」と声を掛け、子どもたちを迎えることができて幸せである。小集団の中で一人一人に寄り添い、じっくりと関わりながら、少しずつの成長に喜びを感じることができる今の環境は、やりがいがある。今までの経験は大きな財産となっているが、特別支援学級の担任を経験しなければ気付けなかったこともたくさんある。教育課程の作成や教科書選択のときなど、現在だけでなく将来をイメージすること、長期的に途切れずに支援することの大切さに気付かされる。今を楽しく過ごしながらも、責任ある立場にいることを忘れてはならないと気持ちが引き締まる。

子どもたちの未来が、小学校での経験や自信が土台となり、笑顔で過ごせている日々であってほしいと願う。そのために、今できることに熱意をもって取り組み、仲間と助け合いながら充実した日々を過ごしたい。そして、子どもとの関わりを楽しめる人でいたい。

那須塩原市立黒磯小学校　齋藤　由紀恵

副園長の教え

大学を卒業した後、最初は中学校の国語の教師になろうと考えていた。そんな自分が、「特別支援教育」の分野の教師として長く仕事をするきっかけとなったのは、かつて私の地元である飛騨高山市の障害者授産施設で働いた経験だろう。

この施設は、当時、岐阜県の飛騨地方では唯一の障害者授産施設で、飛騨養護学校が同じ敷地にあった。施設は、二十歳までの方々が暮らす建物と成人が暮らす建物に分かれており、私は成人を支援する職員として勤務した。

この施設は、通所と入所があり、入所者の割合の方が多かった。私は四人部屋の入所者の担当として、食事や入浴の介助、必要な日用品の用意、休日の郊外活動支援（この後に出てくる投票所への付き添い等）など、いろいろな支援を行った。

職員の勤務時間は、日勤・早出・遅番・夜勤と勤務スケジュールが組まれ、正月などは実家に帰れない入所者の方たちと施設で新年を迎えることもあった。

施設の方たちは、能力に合わせた作業を行い、その他の時間は共同スペースや自分の部屋で過ごしていた。私は重度の方たちの作業班の支援をしていた。作業というよりは機能訓練や体力づくりを兼ねた散歩などを毎日行った。大学で学んだことは役に立たず、いろいろな職務については一つ一つ先輩職員の指導を受けながら学んでいった。

この施設の副園長から教えていただいたことの中で、今でも忘れられないことが二つある。

一つは、「人はいくつになっても成長できる」ということ。私が担当していた重度の方

の食事介助を行っていたとき、近くに来た副園長が「この方は、最初スプーンを持つこともできず、口だけ開けて待っていたが、約十年根気よく支援した職員と本人の努力で、スプーンを持たせれば自分で口まで運ぶことができるようになった。人は成長する速さの違いはあっても、必ず成長する。だから他人がもう無理だと決めつけてはいけない」と言っていた。

もう一つは、施設の職員としての自覚と責任。成人の方と投票所に出掛けるときに副園長が、「この方たちは、私たち職員の言動を見本として行動してしまう、とても素直で純粋な人だ。だから選挙のときに、私たちが不用意に候補者の名前を言わないよう注意する必要がある」と話していた。

その後、縁あって宇都宮で教師という仕事に就き、知的障害特別支援学級、自閉症・情緒障害特別支援学級、難聴特別支援学級、肢体不自由特別支援学級を担当し、たくさんの生徒たちと関わった。難聴特別支援学級では指文字や手話を覚え、肢体不自由者の介助を学び、職務以外では、特別支援学級卒業者の余暇活動を支援する「あすなろ青年教室・ひのきクラブ」の実行委員として卒業生と二十年以上時間を共に過ごしている。その時間の中で、どんなときも生徒の成長を信じて支援・指導し、生徒の将来に影響を与える者としての自覚と責任をもって接してきた。これは三十年以上前に経験した障害者授産施設で副園長から学んだことにつながる。

宇都宮市立晃陽中学校　　松本　有紀

出会ってきた言葉、大事にしていること

子どもの顔を見ているのが好きだ。心のスイッチが入って、頭の中がぐるぐる回り始めた時の顔。私が長く関わってきた聴覚障害教育では「言葉」を育てることが大切なテーマだ。子どもの表情をよく見て、「今だ」というタイミングで言葉掛けをしながら言葉の引き出しを広げていく。子どもが心で感じたこと、頭で考えたことを「言葉」という形にして他者に伝えられるようになってほしい。言葉は思考の種。大事に育てていくことで、子どもの未来が広がっていく。初任の頃、先輩教師に言われた言葉が、今も胸の中にある。

「やりがいのある仕事だけれど、教師の責任は重いわよ」

初任で赴任したのが聾学校だった。周りには聴覚障害教育のプロである先生方がたくさんいて、職員室に飛び交う会話、教室や廊下の掲示物、全てが教材研究のようだった。今の時代、インターネットで検索すればたくさんの情報が得られるけれど、若い先生方には、遠慮をせずに、ぜひ先輩教師に直接質問することをお勧めしたい。なぜなら、そこには貴重なおまけがついてくるからだ。学級や授業の悩みを相談すれば、先輩が経験から得た知識や技術を教わることができる。会話を通して、その先生ならではの子どもの見方や考え方に触れることができる。その時分からなくても、後になって「あの時あの先生が言っていたことはこういうことか」と気付くこともある。このおまけの価値が大きいのだ。

「交流に行ったとき、言葉がまだ話せない子の自己紹介を先生が代わりにしちゃうのが気になるの。本人は全然違うことを言いたいかもしれないのに、確認しないのは失礼よね」

職員室でそう話した大ベテランの先生は、その後、机をたたいて「イエス」「ノー」を確

認する方法をその子と共に編み出し、発展させた。気持ちを表す方法を知ったその子の表情はみるみる豊かになり、自分から何かを伝えようとするようになっていった。言葉を話せないからといって、何も思っていないわけではない。子どもの心と言葉を何よりも尊重するその姿勢から「教師がどう向き合うかで子どもは変わる」ことを学んだ。

初めての異動は、県立の幼稚園だった。晴天の霹靂と戸惑う中、校長からは「初めてだからなんて許されない。六か月でプロになりなさい」と厳しい一言をいただいた。「専門性を高める」ことは教員である以上避けては通れず、学校が変われば、求められる専門性も変わってくる。楽なことではないが、その時々に自分がやるべき仕事に取り組んで身に付けたスキルは、次の仕事にも必ず生きる。「環境の構成」という視点もその一つだ。子どもは身近な人や物と関わり、様々な経験をして育つ。だから、保育現場では、子どもの成長に合わせて安心して楽しめる環境を準備する。これは、保育に限ったことではない。安心できる居場所、やってみたくなる活動、あれこれ考え試せる時間は、全ての学校に必要であり、教員も環境の一つなのだ。プロだと胸を張れるよう、心していきたいと思う。

最後は、かつての勤務校で出会った尊敬する校長先生からいただいた言葉で締めたい。

「先生方一人一人にいろいろな思いや考えがあり、それを一つにするのはなかなか難しい。それぞれの歩幅、歩き方でいいから、つま先だけは同じ方向を向けていきましょう」

学校には、個性あふれる先生方がいて、それぞれの立場で懸命に子どもと向き合っている。学校の中心には、大切な子どもたちがいる。そのことを忘れずに、今の自分にできることを丁寧に積み重ねていきたいと思っている。

県立聾学校　小川　友紀子

子どもの笑顔を連携の輪の中心に

「子どもたちの障害の有無に関わらず、学ぶことの楽しさや人と人とのつながりの大切さを教えられる教員になりたい」。そんな思いを胸に、大学卒業後新規採用教員として養護学校に着任しました。社会への出口が目前に迫る高等部では、職業教育の充実に向けた研究実践が学部全体で進められる中、卒業後一般就労を目指す生徒の担任を経験しました。ある時、担任する生徒Ａは将来希望する職業について「保育士になりたい」と答えました。しかし同時に、資格取得が必要であり自分がその職業に就くことが難しいことも理解しており、静かに泣く姿がありました。教師歴の浅かった私は、担任でありながらどのように声を掛けたらよいのか分からず、肩をさすることしかできませんでした。

放課後、先輩教員にこの出来事を話すと、Ａの思いが重なり胸がいっぱいになり気付くと涙が流れていました。「生徒の気持ちに寄り添い共感し受け入れることは大切。しかし、そこで終わりではない。特別支援学校の教師として、Ａの障害の状況をしっかりと理解し、実態に合わせてＡが前向きに考えられる職業や将来の姿について関係機関や先生方と連携しながらＡを支援していくことがさらに大切だよ」と助言をいただきました。同学年や進路担当の先生方と日々Ａを含む生徒たちの実態や特性に合う職業や進路を話し合い、本人や保護者の思いに寄り添いながらの支援・指導が始まりました。初めて障害者雇用を検討する職場からは、個々に応じた配慮や必要な支援について意見を求められました。一方、私自身が見えていなかった子どもの側面や求められる力などについて意見をいただくこともありました。先輩教員、職場の方々と相談し話合いを重ねていくと、日常的に取り組ん

でいる支援が実習先では障害の理解となり、学校で現場に即した支援をすることがその後の実習や実際の就労と結び付き生き生きと働く姿につながることが分かりました。

年月を経たある日の量販店で「先生！」と声を掛けられました。従業員として働くAでした。その表情からは、晴れやかな笑顔とともに地域社会で自信をもって生活している様子が伝わってきました。児童生徒の将来の夢や希望、共生社会の中で生きていきたいという思いの実現を目指すためには、学校だけではなく様々な地域社会の方々との連携が欠かせないのだと理解しました。

次に勤務した病弱特別支援学校は、様々な疾患を有し心身への日常的な配慮が必要な児童生徒が在籍しており、日々の教育活動においては医療従事者との連携が必須となりました。教育と医療の現場では、子どもを捉える視点が異なりますが、退院後の前籍校復学へのスムーズな移行や、入院中でも学習意欲の向上が期待できる体験的な学習の実施について、その先にある子どもの笑顔を思い描きながら話し合いを重ねる姿勢は共通していました。子どもを中心に据えた学校を含む医療や福祉等の地域社会の関係機関が輪となり連携し、子どもたちの教育に携わっていることを再認識しました。

教師には、日々の子どもたちとの関わりの中で、その特性や障害の理解を丁寧に行い、そこで得た個々に応じた適切な支援や配慮の在り方を、学校から地域社会に伝え、連携し、つないでいく役割があるのだと思います。様々な視点から教育活動に携わってくださる地域社会の皆様に感謝しつつ、連携の輪の中心にある子どもの笑顔に結び付く特別支援教育の在り方を探求し続けたいと思います。

県立国分寺特別支援学校　　大西　真純

教師の楽しみとは

教師を志したとき、先生方は「子どもの成長の一助となりたい」という思いをもっていたのではないかと思います。そして、楽しく分かりやすい授業によって分かる喜びを得てほしい、苦労を共にし、乗り超えた喜びを共に感じたい、という思いが今でも日々の業務をやり遂げる力になっているのではないでしょうか。

特別支援学校に着任して初めて特別支援教育に触れた私は、個別の指導計画とチームティーチングについて、どの校種においても生かせる素晴らしい仕組みだと感じ、先輩教師から多くのことを学びました。特別支援教育の魅力の一つは、個別の指導計画から想起するように、少しずつ課題を解決し、最終目標に到達する喜びにあると感じています。一緒に指導してきた同僚と喜びを共有し、そのときの児童生徒の誇らしそうな表情を見るのは何にも代え難い喜びで、充足感で満たされます。最終目標に向かって段階的に課題に取り組むときに、各段階の適切な課題設定と教材の準備が必要になります。そこで指標を示してくれるのがアセスメントであり、児童生徒の特性や得手不得手が見えて、次に取り組むべき課題が浮かび上がってくるのはご存知かと思います。

特別支援学校の教師としてのほとんどを中学部で勤務してきた中で、小学部と高等部の間の三年間で何を目指し、何に取り組めばよいかを次第に意識するようになりました。特に、他県から来た私にとって、栃木県の教育方針を理解したことがよいきっかけであったと感じます。

前任の県においては、「得意なことを生かして不得意なことを補うこと」「得意なこと

を生かして社会で生きていくこと」を支援の大きな方針とし、個々の力を伸ばしていくことに取り組んできました。そして、アセスメントを基に、個々の興味・関心を生かした授業を進めていました。高等部における進路指導では、一人一人の個性に合う進路先を探す、という方針です。一方、本校では「社会で生活する姿を目指してこつこつ取り組んでいくこと」を大きな方針として、明確に目指す姿があること、その姿に向けての教育課程、教育計画が編成されていることに、着任当初、感心したことを覚えています。そして、小学部から中学部に進学した生徒たちを見ては、小学部での指導に感謝し、中学部の生徒を高等部に送り出すまでに、高等部での活動に必要なことをきちんと伝えて送り出そうという思いを強めていきました。さらに、学習を少しずつ積み上げる中で、生活年齢に応じた課題も見えてきます。それらの課題には、出てきたタイミングで適切に対応し、基本的に学部段階に応じた指導内容からぶれずに取り組んでいくべきであるという考えに至りました。

一方で、児童生徒に必要な力、伸ばせる力をアセスメントにより把握し、教育課程に沿った内容での教材づくり、授業づくりをすることも求められます。私が感じている特別支援教育の魅力の一つは、準備した教材によって、児童生徒が生き生きと学習に取り組んでいる姿を見ることでもあると考えています。「伸ばしたい力」に近付くことは教師と子どもの小さな努力の積み重ねで得られるもので、これこそが教師としての腕の見せどころです。

仕事の経験を積むにしたがって、様々な役割を担うようになります。児童生徒との直接的なやりとりがない業務でも、別の角度からどのような支援ができるか、あの子やこの子の教材や授業を考えるように、楽しんで取り組んでいきたいものです。

県立足利中央特別支援学校　　小林　文子

コラム

自信を育む特別支援教育

日本における障害のある子どもへの教育は、今世紀に入って行われた制度改革により、「特殊教育」から「特別支援教育」への転換が図られました。このことは、障害のある子ども一人一人の「特別な教育的ニーズ」を的確に把握し、必要な指導や支援を行っていく時代への移行を意味しています。

今、「共生社会の実現」が掲げられていますが、言い換えれば、多様性から生じる様々な違いを大切にし、全ての人の人権が尊重される社会を創ろうとするものです。特別支援教育は、現在及び将来の社会にとって、重要な意味をもっています。

本県は、特別支援教育を、障害のある子どものみを対象とした特別な教育ではなく、全ての子どもに対して一人一人の能力や特性に応じた指導・支援を一層充実させ、子どもが本来もっている力を最大限に発揮できるようにすることである、と捉えています。本冊子の内容からも、子ども自らが自信を育み周囲の人々と相互に支え合う関係を築くことができるように、多くの関係者が協働し、子どもへの理解を深め、安心感を高める指導・支援の充実に努めていることが分かります。

一人一人の子どもに目を向ける特別支援教育をみんなで充実させていきたいものですね。

関係資料のご案内

「初めて特別支援学級を担当する先生のためのハンドブック」
栃木県総合教育センター
2019 年３月

「特別支援学校（知的障害）における国語科の指導の充実
～平仮名の指導～」
栃木県総合教育センター
2021 年３月

「栃木県特別支援教育推進計画」
栃木県教育委員会
2021 年２月